# 依頼論文

# 新たなライフステージに至った結婚 移住女性への支援

――地域ボランティアと移住女性の認識のズレをめぐって

サイハンジュ ナ 養漢卓娜 長崎大学准教授

#### キーワード:結婚移住女性、支援、ライフステージ

結婚移住女性のための支援の 1 つに、ボランティアにより運営される日本語教室がある。こうした支援は、社会関係資本を有しない結婚移住女性がホスト社会で出会う問題を乗り越えていくために、継続的でかつ密接な支援を提供し成果を上げている。

本稿では、このような日本語教室を運営する支援者と結婚移住女性の継続的な関係性に着目する。 結婚移住女性は、来日初期の戸惑いや適応段階を経て、女性たち自身が自立するという新たなライフステージに至る。聞き取り調査の結果、この段階において、支援者と女性たちとの間でそれまでとは異なる葛藤やズレが生じていたことが判明した。

研究対象の日本語教室の支援者は、一人ひとりの女性との関係に基づき、ライフコースに寄り添って支援する。支援は、女性たちのライコースに寄り添っているからこそ、「困りごと相談」だけに留まらない。このライフステージでは、女性たちのエンパワメントを最大限発揮させ、「表舞台」で活躍するように支援している。ただ、支援者の地域社会と結びついている支援は結婚移住女性が生活する「場所」を前提としている。複数の場所を移動してきた結婚移住女性たちが思い描く生活設計には、自立のための「移動」の観点が含まれている。そのため両者に差異が生じ、支援者と女性たちは葛藤する。このライフステージで支援は「曲がり角」を迎える。

本稿では、支援者が望ましいと想定する生活設計と、被支援者である結婚移住女性が望ましいと 考える生活設計の間の齟齬が生じていることを明らかにする。そして、「場所」や「移動」の観点 を踏まえつつ、なぜそうした齟齬が生じるかまで踏み込んで考察する。

#### 1 はじめに

ニューカマーの外国人支援のはじまりは、単身の大人向けであり、まずはいわゆる「ジャパゆきさん」に対して、その後は「外国人労働者」に対して行われていた。外国人が日本で家族を形成するようになって以降、子どもへの支援も取り上げられ、学校の場と地域の場で盛んに論じられてきた(例えば、志水、2009)。成人の定住外国人への支援は地域における日本語教育の支援、多文化精

神・ソーシャルワーク,情報伝達などの側面で検討されてきた(例えば、桑山,1995;森篤嗣・内海由美子,2012:石河,2012)。例えば、石河(2012:46-47)は、異文化の中で暮らす人々が、①言葉の障壁、②文化・価値・習慣の違い、③サポートシステムの欠如、④社会システムの違いと情報不足などの困難に直面しやすいと述べ、支援の必要性を唱えた。

結婚を目的とした人の移動は、自己の意志で移動を行ったプライベートな事柄であり、自立した成人の人生選択であることと捉えれば、公的支援の対象ではないという考えがあり得る。しかしながら、結婚移住女性は、「一時的滞在者ではなく、配偶者とともに家族を形成し、子どもを生み育て、農村を中心とした地域での再生産過程を担いコミュニティを形成して」、外国人労働者とともに日本社会の脆弱部分である農村の配偶者不足・高齢者介護を支えてきたと言える(岡田・呉、2013)。こうした特徴からして、個人の移動という意味合いを超えており、日本社会からの支援を受けるべき立場にある。

現状を鑑みると、日本では、結婚移住女性を含む外国人に対して、入国後の社会的、経済的、文化的生活への支援政策は曖昧で、主として管理と統制で処遇しており、韓国のように急増する結婚移住女性とその家族を支援する基本法すら持っていないのが実情である。結婚移住女性とその家族が地域社会で継続的に生活していくためのニーズ、生活上の問題などは、実態があまり把握されていない(岡田・呉、2013)。国際離婚の増加は、支援が行き届かないことが一因ではないだろうか。

国レベルの政策が不十分な中で、外国人住民が多数居住する自治体においては、政府の整備を待って手をこまねいているわけにはいかず、自治体独自の多文化施策をもって外国人住民に対する生活支援を行ってきた。その重要な1つとして、地域における多文化共生の担い手としての日本語教室がある。自治省(現総務省)の指針の下で設立された地域国際化協会は、国際交流協会、国際交流センターなどの名称で、さまざまな活動を展開するが、その活動の一つが日本語教室の開設であり、日本語ボランティアと学習希望者とのマッチング支援や会場の提供を行っている。こうした公的な日本語教室だけではなく、日本語教室には、地域の有志が集まって立ち上げられたものもある。そして、ボランティア主導の日本語教室はその熱意で地道な外国人支援を継続して、外国人とのかかわりを深化させてきた。

本稿は、ボランティア主導で設立定着してきた日本語教室によってなされている。来日後一定期間を経過して人生の新たなライフステージ(人生段階)に差し掛かった結婚移住女性への支援の側面に着目し、支援と結婚移住女性のニーズの間に生じるズレに注目して分析に当たる。その際、場所と移動の視点をもちながら、女性のライフコースに沿うことを分析の重点とする。ここでいうライフコースとは、一定の歴史のなかで諸個人の人生軌跡のパターンを検討する概念であり、また、どの個人もいくつかのライフステージを経ながら発達していくのである(今津、2005:165)。

# 2 結婚移住女性への支援をめぐって

結婚移住女性に支援を要するとして、支援期間が移住当初の短期間で足りるのか、それとも長期間にわたって支援すべきかについて議論すべきである。石河(2012:21)は、移民の「滞在が長期

化することにより、多様化・複雑化・深刻化する生活問題も生じている」と指摘し、自身のアメリカでのインドシナ難民支援の体験から、滞在の長期化で生じる問題として、難民夫婦におけるジェンダーのあり方の変化や親子のコミュニケーション・ギャップなどを例示し、「単発的な情報提供だけでは解決しない。より専門的で継続的な支援、ソーシャルワークの支援が必要になる」と述べ(石河、2012:22)、移住者への支援の必要性と長期に据えた支援の重要性を指摘している。

現在、結婚移住女性を含むニューカマーへの支援は制度面の構築が不足している。支援の最前線 はボランティアによる日本語教室である。1990年代から2000年代初めの結婚移住女性はさまざま な生活問題に直面したときに、自力あるいは個人的な支援でその問題を乗り越えなければならない 状況にあった。そのため、来日初期に日本語能力を向上させて、本人の問題解決の基礎的な力を 培うとともに、人間関係を広げるために日本語クラスを開設する支援体制をつくるべきとの提案 があった(松崎, 2001)。その後、日本各地で徐々に日本語教室の輪が広がってきた。日本語教室は ニューカマーの生活に必要な日本語の学習支援を主要な目的としているが、実は多様な機能をもつ。 日本語教室は誕生の時点から「学習」「交流」「相談」という三つの機能を持っていた(富谷, 2008: 227)。結婚移住女性にとって、日本語教室は言語習得のほか、学習者や学習支援者をはじめとする 地域社会との交流や生活の悩みを相談する場としても機能している(近藤, 2009; 岡田・呉, 2013)。 日本語学習を通じてボランティアとの信頼関係が生まれると、さまざまな相談事が日本語教室に持 ち込まれるようになる<sup>1</sup>。しかし、日本語教室のボランティアによる支援には限界がある。ボラン ティアであるゆえ、継続性や過剰負担、僻地にはボランティアが少ないなど「脆弱な地盤の上に立っ ている」状況が指摘されていた(富谷,2008)。ほかには、結婚移住女性の定住支援は、日本語教室 などの国際交流と切り離して移住者の人権の視点から行政が対応すべき課題であるとの提案もある (武田, 2011)。こうした議論がなされること自体, 日本社会の脆弱性, 結婚移住女性の孤立と乏し い社会資本を物語っている。

さらに、支援の際、移住後の生活が長くなる結婚移住女性のエンパワメントについても言及されている。野山(2003)の外国人支援のための地域ネットワークを機能させるキーパーソン(コーディネータ)の役割が不可欠であるとの指摘を受け、近藤(2009:35-36)は「キーパースンの中に外国人妻の存在もある」べきとし、結婚移住女性は「地域に根ざした地道な活動もまた重要である」ため、簡単な通訳や学校で取り出し授業の支援や自国の言語、文化を紹介するなど「一人ひとりがそのエンパワメントを発揮する機会はいくらでもある」と論じた。

上記の先行研究を通して、制度面の構築が不足するなかで、支援の場でもある日本語教室は言語 学習を超えて、日本社会への理解、地域への定着、そのプロセスに伴う困難への解決など貴重で意 義が深い活動を行っていることが判明した。さらに、日本社会の移民を受け入れる際の限界や制度 の構築の重要性も指摘された。また、結婚移住女性は被支援者にとどまるのではなく、地域に根ざ す支援者になる可能性、移住の長い女性のエンパワメントの発揮への言及は貴重である。

しかしながら、先行研究では以下の視角が見落とされていると考える。①支援者側に立つ論調が 一人歩きし、結婚移住女性の姿は曖昧で、不可視的な存在となる。はたして彼女たちはどのような 支援を求めているのか。支援者の支援したいままの支援に同意しているのか。②支援の内容は来日 して短い時期の需要を満たすものが多く、長期にわたる、とりわけ結婚移住女性のライフコースに沿った支援に関する研究があまりなされていない。③多文化共生をより実感をともなうものとして「地域社会に根付かせていくため」という論調が自明視され、はたして地域への定住につながる支援、あるいはマジョリティ側が適切だと考える支援だけで十分であろうか。これらの視角の欠落によって、移動してきた個々の女性の文化、エンパワメント、人生におけるデザインは見えにくく、場合によって消されるもの、あるいは過小評価されかねないことが生じる。結婚移住女性の滞在長期化に伴い、支援の内容の変化と、移住女性に対しいかなる支援が妥当なのか、に関して今一度振り返って検討する必要があると考える。

上記の①と②について、猿橋(2009)は支援技法に関して、「何を支援するか」から「いかに支 援するか」という視点の転換によって、「支援のあり方は、支援制度を利用する側のエンパワメン トを基盤に置き、どのようなライフコースを構築していくかを改めて見直した。さらに、異業種間 の連携を有機的に行いながら、適切な介入と、自立に向けてゆるやかな支援の縮小、アフターケア などの長期的な支援過程がデザインされるようになっている」と論じた(猿橋,2009:37-38)。この ように、被支援者に寄り添い、支援される側が送りたいライフコースを確認しながら、自立に向け て長期的なアフターケアの重要性が指摘されている。また、③の結婚移住女性への支援の場におい て、「地域に根ざす」定住、あるいは安定を自明視される潮流に対し、伊豫谷(2007:4)は、移民 研究者が「安定した一定の領域、固定した場を正常な位置として想定し、移動する人を例外として 観察してきた」と指摘した。先行研究も「人の移動はあくまでも一時期で例外的な出来事であり、 移動とその者は正常からの逸脱」と捉えられてきたと考えられる。上記のような認識のもと、「固 定した場と移動する人」という二項対立的な構図が出来上がり、「保護者としての定住者と保護を 受けるべき移動する人々との関係」が非対称的な権力関係として表れてきている。じっさい、支援 の場においても、「支援者=マジョリティ=定住者=保護者 ⇔ 被支援者=マイノリティ=移動 する人=保護を受ける人」との関係が知らず知らずのうちに固定化する。支援の場でも、定住とい う「常態」に移民を取り戻す力学が働く。「居るべき場所」としての定住を暗黙の前提としてきた 研究方法は、移動から場所への視点の転換が迫られている。そこで、場所から移動をとらえるだけ ではなく、移動から場所を問い直すことが必要となり、つまり、移民女性の立場に立って支援を検 討し実践することが重要である。

先行研究の知見を受け、本稿では、相談の場として機能している日本語教室の支援者と結婚移住 女性の相互関係を考察する。入国当初とは違い、日本語が上達し、地域社会の仕組みを理解し、生 活や子育てに慣れてきた一定の年月を経ている結婚移住女性のニーズと支援者が行う支援とのズレ (ミスマッチ) に焦点を当てる。その際、移動の視点をもちながら、女性のライフコースに沿うこと を分析の重点とする。

### 3 研究概要

#### (1) 調査対象と方法

本稿で扱う研究対象者は日本の中部地域に位置する T 市に居住している。 T 市は農家数や経営 耕地面積は年々減少しているとはいえ、農業産出額は全国上位であり、輸送機械製造業などが大部 分を占める工業地帯もあり、農業も工業も発展を遂げている比較的裕福な農業地域である。 T 市は、2013年3月時点では総人口は7万人ほどであり、外国籍住民は人口の約2%を占める。外国籍住民のうち、中国籍は約7割、フィリピン籍は2割弱を占めている。 在留資格別でみると、「技能実習」が最も多く、外国籍住民の70%を占めており、農業・工業地域の特徴を物語っている。 結婚移住 女性が最も多く所持すると思われる「日本人の配偶者等」「永住者」の在留資格を合わせてみると、フィリピンは110人、中国は84人である。そのほかにも、近年日本国籍に帰化した結婚移住女性も多数いるが、日本国籍であるため上記の統計に含まれていない。

著者は10年以上T市の中国出身の結婚移住女性にかかわり、さらにその家族、ボランティア、自治体関係者にもインタビューを重ねてきている。本稿のデータは2013年11月に行ったボランティアと結婚移住女性に対するインタビューによるものである。調査手法として面接による聞き取りを採用した。面接場所は、支援者の自宅、活動場所である公民館などであり、結婚移住女性の場合、自宅や散歩道や車の中、電話などさまざまである。支援者および結婚移住女性の許可を得て録音し、その録音は筆者が文字化し、時系列に整理した。路中など録音しにくい場合には回想して記録をとった。

# (2) 日本語教室活動

T市には結婚移住女性を支援する日本語教室として A 教室, B 教室, C 教室の3つがあり, 地域ごとに分布している。 A 教室は1990年に発足した自治体国際交流協会主催のボランティア団体である。活動目的は、「近隣に暮らす在住外国人に日本語を指導し、地域社会に溶け込む手助けをする」ことである。2000年代は中国人をはじめとする結婚移住女性が多く通っていたが、現在の学習者は主に技能実習生となり、結婚移住女性および連れ子1~2組がいる。 B 教室は、1998年に成立し、前身は国際交流協会主催の日本語教室であった。日本語教育を専門とする日本語教師がおり、学習者には日本語能力試験合格者が出ていて、多い時は30名近くの技能実習生や中国人結婚移住女性等が通っていた。現在生徒が減り、有料の語学教室となり、生徒は主に技能実習生である。C 教室は、元学校関係者の呼びかけを受け、地域の有志が2000年に設立したものである。活動目的は、日本語能力の向上を目指すと共に、地域に根付いた文化や生活支援の場を提供し、悩みや困り事のある時に仲間と共に語り合える場になることである。中国人を中心に、フィリピン人、ブラジル人等計25人の結婚移住女性が登録している。C 教室は日本語指導にとどまらず、料理・手芸等の生活文化講座も実施し、健康相談・困りごと相談等にも対応している。

上記の3つの会は性質が少しずつ異なる。A 教室は発足が早いので、来日まもない結婚移住女

性の相談の場になった。スタッフの話によれば、2000年前半では、孤独、不慣れ、お姑との不仲、家族による疎外感や警戒心、運転免許取得等の相談が中心であった。最近、結婚移住女性同士のネットワークが出来上がり、相談自体が少なくなったという。少なからずあるのは、子どもの進学相談事や仕事情報探しである。B 教室は最も日本語教育に力を入れている。C 教室は、活動内容として相談の対応をすると明言し、少人数で長い付き合いをしており、結婚移住女性はよく相談に利用している。代表をつとめる元学校関係者は精力的に結婚移住女性をサポートしている。本稿では、C 教室の事例を紹介する。

#### (3) 結婚移住女性の概況

T市では、1990年代と2006年以降に来日した女性は少数派であり、2000年前後~2005年に中国人女性が集中的に嫁いできた。ピーク時に来日した結婚移住女性たちは嫁いできて10年くらい経ち、さまざまな変化がみられるようになる。

T市の中国出身結婚移住女性のライフステージはおおよそ3段階に分けられる。

[第1段階] 来日当初~5年以内。夫婦間・家族間の日本語によるコミュニケーションが困難である。日本の習慣や嫁の性別役割分業など家族のあり方に戸惑う。日本語学習が最大の任務である。 [第2段階] 来日5年前後~10年以内。子育てに追われ、日本で育児することに不安を感じる。 日本のことを少しずつ理解し、簡単な日本語が話せるようになり、日本語学習の必要性を痛感するが、多忙さなどによって日本語学習から遠ざかる。

〔第3段階〕来日10年近く~15年位<sup>2</sup>。子どもは小学生,地域社会の仕組みがわかるようになる。家庭における地位が確立する。家庭での発言権が増したり、主導権を握ったりしている。一部は夫の代わりに大黒柱の役割を果たすようになる。子どもはまだ小さいが、年齢差のある夫婦も多く夫は老いてゆく。将来への不安や退屈さが生まれる。何かをしたい、何かをしなければならない、変化を起こしたいとも考える。

ピーク時に嫁いできた女性たちは、初期の第 $1\sim2$ 段階を経て、現在はまさに人生のターニング・ポイントに立っている。日本語は読み書きを別にして、会話と聞き取りは日常生活レベルでこなせるようになってきている。地域住民は、「中国人のお嫁さん」の存在にもかなり慣れてきた。大半の結婚移住女性の義理の両親は要介護の高齢になりつつ、平均して10歳~20歳年が離れた夫も50代~60代に突入し、体力的に衰えてきている。女性は貴重な労働力として、家の支え手として家庭における重要性が増してきている。また、日本の学校文化、保護者との付き合いにもある程度慣れてきている。一部の女性および夫はPTA役員も経験している。女性たちは、来日当初から抱えていた不安や緊張は少し解け、余裕が生まれつつあると同時に、我に戻って何かをしたくなり、変化と挑戦を求めたり、求められたりする時期でもある。

# 4 結婚移住女性の新たな動きと支援

ここでは、C 教室の代表として長い間結婚移住女性の支援に携わってきた N 氏と結婚移住女性のインタビューに基づき、C 教室に通う中国出身女性の支援例を取り上げる。N 氏は 60 歳代の女性で、元学校教員である。結婚移住女性全員は日常生活において日本名による通称を使用しており、その現状を反映し、かつプライバシー保護のため、日本名による仮名(鈴木あゆみ、谷村りえ、河内恵子)を使用する。

#### (1) 転職をめぐって――経済問題と家族に高齢者を抱える結婚移住女性への支援

鈴木あゆみ (40歳台) は、中国南方農村出身で出稼ぎ労働を経て国際結婚紹介所の仲介で 2001年に T市に嫁いだ。家族には 90歳台の舅と元トラック運転手の夫と、小学校中学年の子ども 2人がいる。家計を補うため、内職をしていた。夫の定年退職によって、大幅な収入減が伴う。子どもがまだ小さいので、「これからどうしよう」と心配し、いつもトマトや大葉農家に電話をかけて仕事の有無を尋ねていた。N氏に「定まった仕事に落ちつきたい」とこぼした。N氏は、鈴木さんに舅の面倒をみながら介護士の資格を取ることを提案し、学歴が低く、自信のない彼女の背中を押した。N氏は福祉専門学校に行き、「私たちが面倒をみるから」と頼み込み、何とか入学までこきつけた。「途中でやめたら困る、私は見栄を張っちゃってね。とにかくあの子は頑張った」。鈴木さんに勉強の仕方を教えたりして、二人三脚で無事に二級ヘルパーの資格がとれた。修了後、学校が推薦してくれたところにいったん就職したものの、風呂当番や汚物の処理ばかりで腰を痛めて気持ちが萎えていた。そこで、N氏の知人の福祉会社に面接を経て無事に雇ってもらった。先輩とチームを組んで、地域をまわるようになり、近所でも話題になった。N氏はひと安心した。

しかし最近、「お年寄りたちは喜んでいる顔でうれしい」とやりがいを感じる一方、給料が安いから、もっと給料の高いところを探したいと鈴木さんは言い出した。N氏は、「今は旦那が定年になっても、やっていくという最初の気持ちがずれちゃって、あれ(長期的な視点)がないな」と違う考えを示した。「ヘルパーも、地道に働く時期があって、ここまで我慢してやれば、一つランクが上になる。なかなか外国人はそこまで追い求めないけど」と支援の難しさを語った。また、介護士の仕事について、「暗い、汚いそういう仕事だから、あまり(給料が)高くはない。ただ、きついけれども、需要があるし、そういう人とのふれあいで自分が変わっていく…。国家試験をとおったし、そこで正社員として雇ってくれれば、ボーナスも出るし」と転職すべきではない考えを示し、さらに、「仕事を変わりだすと、癖になって、いくつもいくつも変わる人が多いでしょうけど、そこを乗り越えれば、またクリアしていけるものがあるから」と指摘した。「近所は昔、『(あの家は)喧嘩ばかりしている』といったが、このころは「ヘルパーだってね」と言うようになった。近所の人の見る目は変わった。せっかくそこまでいっているのにね。今まで『あ、あれ中国人だ』と横向いていたのが、今度『あゆみちゃん、年を取ったらたのむよ』とか、『(面倒) 見てね』とか、『もうじきうちのおばあちゃんはあれになるから、来てよ』とか、『(面倒) 見てね』とか、『もうじきうちのおばあちゃんはあれになるから、来てよ』とか、そういうことを言ってくれるのはうれしいじゃない

ですか。もうちょっと頑張ってくれるといいね。…ある程度のところまでサポートできるけど、そこから先は自分で選ぶ道だから、まあ、あとから嫌だったとか、また、失敗を繰り返して、いつかはなるかな、それでは遅いので、我慢しなくちゃいかんかなと思っている」。N氏は結婚移住女性が地域の人々に本当に受け入れられ、頼られるようになる理想像を語り、さらに支援の限界と女性当人とのギャップについて触れた。

他方、鈴木さん自身は転職についてこのように述べている。「N 先生は本当に助けてくれた。この介護士の資格も N 先生に励まされたから得た、私だけだと勇気がなかった。でも、今とても悩んでいる。給料が安くて $^3$ 、夫は定年退職しているので、これだけではやっていけない。ハードワークで腰を痛めている。正社員になったら、定年まで 20 年間も働かなくてはならない、体を完全にだめにしちゃうよ。職場の人間関係も難しくて、頑張っても目を付けられて文句をいわれる。日本語による記録も難しくてね。正直正社員になれないと思う。派遣で工場の製造夜勤への転職を考えている。(悩みを N 先生に)言わない。とてもよくしてくれたので、こんな小さいことで面倒をかけられない。我慢すればいい。N 先生は私に抱く希望が大きくてね。でも、私は自分、子ども、家庭のために働かなくてはいけない」。

## (2) 起業をめぐって――農家に嫁いだ女性への支援

谷村りえ(30代)は中国東北地方小都市出身で、大都市への出稼ぎ労働を経て国際結婚紹介所の仲介で2002年にT市の専業農家に嫁いだ。夫との間に小学生と幼稚園児の子どもがおり、夫の両親と同居している。来日してから、家事や育児の傍ら、家の農業を手伝っていた。C 教室は、料理教室を開くとき、活発な谷村さんを講師に立てて中華料理を住民に教えたり、市の関連行事のときも周囲に「頑張っている農家のお嫁さん」として紹介したりすることで、いろいろなところから「C教室の谷村さん」に声がかかるようになった。彼女の料理の腕が着実に上がり、みんなから美味しいと言われるようになった。

最近、谷村さんは持ち帰り用の中華料理屋をやりたいと言い出すようになった。N氏は、資金調達をはじめ、調理師免許取得や経営の面や衛生、収支面などさまざまな困難をあげて、さらに「中華料理屋ですでに溢れるほどメニューが出ている、毎日買ってくれる人はそんなにいない、無理だ」と反対している。また、谷村さんは準備段階として、家に農業研修生を雇い入れ、自分は惣菜担当のパート労働に出るようになった。N氏は「家の仕事が一番大事、だってお店開く際には資本金が要るし、資格も取らなくちゃいかん、当たるか当たらないかわからないようなことをやっていても、(基礎になる)家の仕事を失っては元も子もないよ」と農家の仕事を投げ出すことを批判した。谷村さんの起業熱について「自信が出てきた。自立しよう、起業しようという気持ちが出てくるのは、いいことだと思うけど、先のことは読めない、ハウスを売るまでやらなくてもいいのに」という。N氏は「(谷村さんの起業は)まだ時期は早い。これから食というのはね、すごく大事だし、いい製品を作れば、それなりに認めてもらえるし、自分の家で食べるものは畑があるんだから、自分で健康にいいものを食べれる。よそで人に使われるよりよっぽど社長だと言えるのだから、見直してもらえると嬉しいな」と説得している。だが、「(女性たちは)自分の言うことをみんな通してきた人

たちだから、だから通さないと、なかなか…」と、彼女たちが最終的に自らの意思で行動することへの諦めもある。

N氏は、谷村さんのお手本として、植田春奈さんの事例を紹介した。植田さんは感心するほどの働きぶりである。しかも、中国や中国人の嫁をののしる姑ともうまく付き合っている。N氏は「(植田さんは) 上手にやっていると思う。だから、谷村さんも自分で工夫をすればよかった」とつぶやき、「みんな定着してくれればいいけど」と期待を述べた。

一方谷村さんは、自分が農業に不向きだと思っており、日本での生活に慣れ、子育てにようやく一息ついたところ、「そろそろ何かをやってみたい気持ちが日増しに強くなった。昔から商売をやってみたかった。このままだと、日常に埋没してあっという間に年を取ってしまって、何もできなくなる。やる気満々だったけど、みんなが反対している。本当は、大儲けしようとしているのではない、じゃ儲けなければ、やる意味がないでしょうと言われるので、困る | と悩む。

#### (3) 子連れ海外留学をめぐって――核家族の結婚移住女性への支援

河内恵子(40歳台)は、中国南方の大都市出身で、間接的な知人の仲介で2000年にT市に嫁いだ。 建築業の夫との間に小学校高学年の子どもが1人おり、核家族である。来日してから、農家などで パート労働の傍ら、熱心に子どもの教育に取り組んできた。河内さんは言動が慎重で日本語が比較 的上手であるため、N氏は河内さんを外国人の代表として市の審議会の委員に推薦した。河内さん は市の多文化社会のための支援プログラムの改定に携わることにもなった。

N氏は「(審議会は) そうそうたるメンバーなのよ,結構すごい審議会っていうか,地位としては,市では一番の状況ですね。でもね,そこで(河内さんは)ちゃんと発言している」と褒めている。確かに,非常に名誉なポストである。だが,河内さんは審議会メンバーになることは「私にとって意義が薄い」と言う。理由として、「外国人を助けたいよ。でも,知れば知るほど面白くない。(市は)外国人住民の状況を調べるのに、日本人住民にアンケートを配るし、プランは結局前年度と変わらないし、支援に関する実質の内容がない」と自治体外国人支援策への違和感を示した。

また、河内さんは、このままだと子どもの将来が開花できないことと、日本文化一色になりかねないことを危惧している。もっとグローバルに育てたい一心で、子どもの中等教育から海外で受けさせようと下調べを進めている。娘の海外留学に反対した夫に時間をかけて説得し、同意してもらった。河内さんは同伴するつもりで、予定では中学校から高校までの中等教育段階を外国の国際学校で受けることになる。N氏は聞いた後、「飛び出すというすごいことを考えている」と驚きを隠せない。河内さんの子連れ留学について、筆者はC教室だけでなく、ほかの複数のボランティア支援者の間で子どものためにならないと批判の声を聞いた。N氏は「自分でも進む道を考えているから、それはまたそれなりに見守ってあげたいかなと思って、私は最初びっくりしたけど。でもそのつもりで自分で計画を立てているから、そうやることはいいことだと思っている」と、見守る態度である。

河内さんは子連れ海外留学について、このように述べている。「留学の最大の目的は娘に外の世界を見せてあげることだ。ここの女性はあまりにも地位がない。子どもたちの母親に対する態度は

本当に悪い (母親の地位が低い), ○ちゃんは女の子だから, 将来苦労する。地域やマスコミによる中国蔑視も根強い。娘でさえも, 『あなたたち中国人は悪いことばかりやる』というようになった。彼女を連れ出さないと, 将来私を母親として認めなくなる。娘には大きくなったら, 将来の道を自分で選んでもらう。一つ言語が増えると, 選択肢も増える」。また, 自身の人生についても触れた。「日本で生きることにとても疲弊した。ストレスが多すぎる。(悩みは) N 先生たちに言わない,言っても変わらない」。

N氏をはじめとする C 教室は、結婚移住女性の人生に寄り添って、支援していることが事例を通じて浮き彫りになっている。また、C 教室は女性たちを見極めて、それぞれの特徴に合ったと思われる内容で支援してきていることが分かる。しかし、語りから女性と支援者との対立も生じており、考え方は必ずしも共有されているとは限らないことが判明した。

# 5 支援者と被支援者の間に生じるズレの背後

インタビューを通じて、C 教室は結婚移住女性のライフコースに寄り添って支援に励んでいることがわかる。しかしながら、寄り添うだけでは限界があることをも合わせて指摘したい。

#### (1) 場所に縛られない可能性への理解――「移民不在の支援」を問う

その限界の一つは、支援活動が「地域に根ざす」ために生じる被支援者の希望とのズレである。 支援者側はT市という地域に根差しているうえ、その土地柄である着実性や確実性を重要視する 姿勢を有しているが、これは結婚移住女性のライフコース設計との間にズレが生じている。

C 教室は、鈴木さんに介護士になるよう、応援し、就職の世話をしてくれた。地域で活躍することで、かつて差別していた地域の日本人に見直され、頼られるヘルパーになってもらうことを期待している。農家に嫁いだ谷村さんを応援するため、母国料理を紹介するなどの行事を通して、これまで家庭に閉じ込められてきた結婚移住女性に、地域で「表舞台」に出るプラスの経験を持たせ、嫁ぎ先の農家と地域に愛着をもち、自信をもつことを期待している。同様に、河内さんにさらなる「表舞台」を用意し、外国人として最高の名誉である市の審議会の委員として推薦した。

しかし、鈴木さんは、転職を考えており、介護職を離れて別の業種に参入することを考えている。 谷村さんは農業離れして開業したい。河内さんは、子連れ海外留学といった日本を離れるさらなる 移動を企んでいる。N氏は「みんな定着してくれればいいけど」と定着支援を続けてきたが、上記 の3人はいずれも、いわゆる「不安定な移動」からせっかく手に入れた定職、安定、定住を手放そ うとする。N氏にしてみれば、上記の行動はある意味で「逸脱」行為であるとさえ映る。そこで、 地域に定着し、農業に楽しみを見いだし、因習や差別とうまく付き合う植田さんは映し鏡的なお手 本となる。

C 教室は女性移民を最大限支援しているが、これらの支援は定着する過程で彼女たちが受け入れ 社会とのかかわりをもつ支援であり、よりよく地域で生きていけるための定着支援であると言えよ

う。むろん、このような支援は、人道的で好意にあふれ、とりわけ初期では必要不可欠な活動であることは言うまでもない。ところが、ライフコースにおけるターニング・ポイントに差し掛かったとき、すべての人に適合するわけではなくなる。

上述の支援の事例は、まさに場所からの移動と捉えることになる。すなわち、「場所」を固定した定住を是として、「正常から逸脱した移民がもう一つの正常にいかに戻るのか、あるいはもとの常態にいかに回帰するのか」という定住の観点に基づくものである(伊豫谷、2013:4)。そこに固定した「場所」から「移動」を捉える目線があるからこそ、結婚移住女性の「不安定」な「飛び出す」行為は逸脱と見える。結婚移住女性は複数の場所を移動してきており、「移動」の中で「場所」を把握している。それゆえ、このような支援は、やや強く言えば「移民不在の支援」的な要素を含む。場所を固定した考え方は、移民研究のみならず、支援の場でも深く浸透していることがわかる。

地域(ここでは「場所」)に定着するための支援を求める者もいれば、「定着」しない、「安定」しない人もいる。「飛び出す」ための支援を求める結婚移住女性も存在するだろう。その場合、支援は「定着」「安定」していくだけの支援となるのか、それとも飛び出すための支援にもなれるのかについて考えねばならない。日本、もしくは地域という場所が、あらかじめ所与のものとして与えられているわけではない。移動の観点から場所を問い直してみると、支援の内容は「定着」「安定」に限る必要がないことになる。

移動する者に視点を転じれば、地域社会や日本に「定住」もしくは「安定」しない生き方への支援が要請されることが見えてくる。「地域への定着」への支援から、一人ひとり移民個人への支援へと転換することが迫られている。移動という経験によって、ルーツ (roots, 起源) としての故郷だけではなく、ほかにも複数の集団的な移動の経験がある。移動する者はいかにして今に至っているのかといったルート (routes, 経路)を問う必要がある (伊豫令, 2013: 渋谷, 2013)。事例の3人はまったく異なるルートを経験してきており、日本における経験だけではなく、それまでのルートにも影響されるので、場所に縛られない移住女性への理解を深める必要がある。

#### (2) 支援者と被支援者の労働観, ジェンダー観などの違い

支援者と被支援者との間のズレは、「場所」だけではなく、労働観やジェンダー観にも表れている。 事例で提示した鈴木さんの「給料が安い」「体がきつい」「人間関係」などの理由によって介護職を離れて転職したい動向、谷村さんの農業離れ、家業から独立しようとする動向、河内さんの「表舞台」への違和感や女性の地位の低さや閉鎖性ゆえに地域を飛び出して「子連れ海外留学」の動向において、支援者と被支援者の間にズレが生じている。本稿の事例に限っていえば、労働観、ジェンダー観、教育観などについて双方の間に生じるズレは、日本人支援者と被支援者の来日前に所属していた社会の文化の違いが作用していることも軽視できない。

まず、労働観について、中国文化において程度の差があるものの、転職、所属意識、職業の社会 評価などに関して日本のそれとはかなり異なる点を指摘できよう。中国人女性の就労観は欧米の キャリア女性の価値観に似た個人主義、強い上昇志向がみられる。家事や単純作業に満足しない傾 向が日本人女性より高く、高学歴層でなくとも真剣に自分のキャリア開発に取り組むことが多い(電 通,2004)。また、多くの日本人は、一生涯に一職業に従事し、また同じ会社で人生を送り、会社に対し忠誠心をもつことを一つの理想の形と捉えてきた。地道に「順番」を踏み、コロコロ転職せずに堪えていくことこそステップアップの筋道という日本の労働観に対し、転職は中国などの国では一般に行われている。度重なる転職を通じ、自身の価値を高めていけると考えられており、転職によってより良い職場と待遇に巡り合うことはむしろ評価される。結果的に、中国出身者は勤務先に対して日本人ほど忠誠心を抱かず、一つの職業を地道に続ける気持ちが弱いように映る。さらに、中国では、日本以上に、農業は社会的職業的な威信度が低いため、中国では農業を軽視する傾向が強い。また、他人の身の回りの世話をする一連の仕事、とりわけ介護のような仕事は専門職として認識されておらず、むしろ家事労働者の範疇となっている。農業に携わった女性や介護職の女性は屈折した気持ちをもつ可能性があり、タイミングを見計らって、ほかの職業でやり直しを考えることもあり得る。生活状況の如何を問わず、就職先を選定する時に中国人は日本人より予想以上に「給料」を重視していることも挙げられる(電通、2004)。

次に、ジェンダー観念と教育観について、事例で行われている支援を詳細に見ると、「家のなか にいる女性」あるいは、「家と矛盾しない女性」という前提がみえてくる。言い換えれば、移住女 性の家と相容れぬ支援をしないことである。その前提があるため、必然的に農家の一員、介護義務 のある女性、地域で子育てする母親などの枠の下で支援することとなる。それも、農家は「個々の 構成員の単なる集合を越える以上の独自のまとまりをもつ組織なのであり、『家』という独特の編 成原理に特徴づけられた集団 | (永野、2004:131) であり、個よりも家という集団の存在が絶対的 である。現代日本の農村の女性は重要な「労働力」であり、その上に「他の家族成員の役割の隙間 を埋める」「補助」や「脇役」である(永野、2004)。農村に限らず社会一般でも、日本人女性の就 業率が低いことや、第三次産業に集中することや、社会に容認される賃金の低さのため、女性の労 働の積極性を妨げ、女性の家における役割、母親としての役割を強調される。他方、男女平等教育 を経た中国では、女性の高い就業率に対応する形で、家事労働は女性だけの義務ではなくなってお り、「単に夫婦でフレキシブルに役割を分担するのみならず、夫婦、祖父母(同居、近居双方)の間で、 性別にかかわらず、その時にそのことができる状況にある人がする」(宮坂、2007:113) 慣習がある。 農村に嫁いだ中国出身女性は、農村地域における「嫁」の性別役割分業観に強い葛藤を抱えること が報告されている (賽漢卓娜. 2011)。このようなジェンダー観念の違いによって、家に留まること と地域に留まることに関して支援者と被支援者の間に認識のズレが生じる。さらに、教育が重視さ れ、かつ外国志向の高い中国では、高等教育だけではなく、中等教育でも「留学熱」がある。中国 の親は、子どもの教育のためなら努力を惜しまない。また、移動する人の考え方自体は、「定住者」 に比べ、ローカルに束縛されず、グローバルな教育発想をもつことにつながりやすい。

そこに、帰属意識の違いも指摘できよう。日本人は非常に高い割合で今住んでいる市区町村に帰属意識があるのに対して、中国人はそう考える人が非常に少ないという興味深い違いがみられる(電通, 2004)。

以上の例示が示したように、支援におけるズレの背後に、移動と場所の問題、また定住者と移動 する者の考え方の違いが作用していることを看過できない。

# 6 支援側の曲がり角――ライフコースを通して、寄り添って支援すること

T市の日本語教室は、2008 年前後まで多数の結婚移住女性が通っていたが、その後徐々に教室に顔を出す人が減ってきている。近年、新規に来日する結婚移住女性は大幅減となったこととも関連がある。それは、日本全国の状況をも反映している。日本人男性と外国人女性との国際結婚は、2008 年の35,993 件をピークにし、2012 年の17,198 件まで激減してきた。新規の結婚移住女性が減少し、来日年数の長い女性は日本語能力が十分に伸びたとは言い難いなか、日本語教室離れが起こっている。C 教室も例外ではない。登録数は維持されているものの、毎回参加する人は減っている。N 氏は教室の存続について、このように述べている。

「みんな『C 教室の人たちはどんどん卒業していくでしょう』といっている。でも日本語だけじゃなくて、私たちはみんなそれぞれが定着していく人間形成も見ている。だからその教室はそろそろ終わりと簡単に言う人があるんだけど、そういうところ(人間形成)まで入って見ている。やっぱりある程度アドバイスをしてあげたいし、いいことを自分たちで一生懸命やっていこうと言っている。めちゃくちゃのことがあるだけに、今は曲がり角かな。…(彼女たちからは)やっぱり目が離せなくて、だから、やめられないね」

日本語教室は、日本語学習の支援だけではなく、移住女性の人生にもかかわる「人間形成」への支援をする必要性があるとN氏は述べている。そもそも「人間形成」は、人が人として生まれ、人として育ち、育てられていくプロセスの全体を指す。だが、ここでいう「人間形成」は「それまで属していた社会・文化から異なる社会・文化へ移行する場合に、そうした困難を円滑に望ましい形で通過するための過程」という「予期的社会化」(今津、2008:28-29)のことも含まなければならない。母国にいれば、予測がつきやすく、相談先や支援してもらえる社会関係資本をもって乗り越えられる。しかし、女性たちは日本に移住したため、異なる社会・文化への移行が重なって、深刻な困難に直面しかねない。また、異文化の社会であるだけに、予測は働かない、あるいは当該社会に合わないことが起こる。それは、日本語ができるだけではどうにもならないことである。そこには、心から信頼でき、かつ社会経験が豊富で、包容力があり、異文化に知識を蓄積している人材の介在が必要となる。日本語教室はこのような役割を果たしていると考えられる。

また、日本語教室はストレス解消にも役に立つ。N氏は、「順調な時はあまり何とも言って来ないけど、いやな時や困った時に言ってくる。…いろいろと言ってくるだけで『はけ口』になるし、いいかなと思っている」と女性たちの行動パターンに理解を示している。人間関係が薄く、親族・近隣でさえも濃密に付き合わないことが多い日本の地域社会で、孤独感を抱えている移住女性にとって、「はけ口」は非常に重要である。

N氏をはじめとする C 教室は、進学や手続きなど困ったことだけの相談ではなく、人生の設計まで相談に乗ることになっている。困ったことだけであれば、ある程度役所の窓口で解決できるが、

「人生の友」や「人生の良き伴走者」とは別である。マイノリティの人生に寄り添い、ルーツではなく、ルートの考えで個々の人間に合った支援は、より平等な関係を構築でき、より理想的な「支援一被支援」の関係性に近づけると考える。

N氏のC 教室が運営上の「曲がり角」を迎えているにしても, 存続の意義があると筆者は考える。 それは、日本に移住して、新しいライフステージを迎え、「予期的社会化」が伴う移住女性を支援 し続けることができるからである。

# フ 結び

本稿では、C 教室が女性たちのライコースに寄り添い、新たなライフステージを迎える女性たちのエンパワメントを最大限発揮させ、地域に根ざすため「表舞台」で活躍するよう支援することが事例を通じて浮き彫りになった。N 氏がキーパーソンである C 教室の支援活動は、貴重な活動と言えよう。結婚移住女性の経験を鑑みると、ライフステージごとに新たな課題を抱えることになることが分かる。各自で乗り越えることを期待したいが、社会関係資本など持たない女性たちにとって長期にわたる支援があることでよりよく生きることができよう。

それでも、支援者と被支援者の間に、認識のズレが生じている。そこには、定着支援における「移民不在の支援」の問題点と、支援者と被支援者の労働観、ジェンダー観などの文化の違いがあることを指摘しておく。上記の要因を軽視する支援を行うと、非対称的な権力関係に陥る支援となっていくのであろう。

本稿は、外国人支援の課題において、支援における「場所と移動」「前提とする文化の不一致」の視点と可能性を議論として提起した。複数の場所を移動する者であるからこそ、移動する人だけがもつ強さを備えている。彼女たちのエンパワメントをいかにして最大限生かしていけるのかは、今後の課題となるであろう。また、外国人住民支援という対象を限定した枠組みで政策を議論するのではなく、多文化共生社会の形成という結婚移住女性に限らず日本人を含む社会全体のビジョンという枠組みで、すべての住民の多様な生き方に関する議論を発展させていくべきであることを指摘しておきたい。

- \*1 農村地域で日本語教室は交流の場、相談の場になる一方、日本語学習に専念し、相談事を持ち込まれないようにする日本語教室もある。新潟県南魚沼市にある市民組織「夢っくす」が運営する日本語教室は、複雑かつ深刻な問題を抱えやすい結婚移住女性の場合、相談者の手に余る問題をつなぐ先がないため、受講者との関係を「日本語」に限ろうとし、学習者側にも「面倒な学習者」にならないようにしようとする規制が働くという報告がある(武田、2011)。武田も認めたように、「問題を抱えた支援が必要な結婚移住女性であればあるほど、日本語教室での充足感は低下していく」ことになる。日本語学習に限定し、ボランティア組織と結婚移住女性とは接点があるものの、「非常に表層的な関係」に留まっていることも指摘される。
- \*2 本文中の段階は2000年前後から来日した女性の特徴である。1990年代にも数少ない中国人女性たちが嫁いでおり、彼女たちは来日して20年前後過ぎている。彼女たちは第4段階を送っているともいえる。子育てにおいて、日本文化への同調は特徴的といえる。それについては、筆者は別稿にて検討している(賽漢卓娜、2014『異文化

128 Migration Policy Review 2014 Vol. 6

間教育』39号を参照)。

\*3 調査時, 鈴木さんの話によれば、10万円以下とのことである。

#### 《参考文献》

- 石河久美子, 2012『多文化ソーシャルワークの理論と実践―外国人支援者に求められるスキルと役割』明石書店
- 今津孝次郎, 2005「社会化とライフコース―変動社会の人間形成」宮島喬編『現代社会学』有斐閣, 164 ~ 181 頁
- 今津孝次郎, 2008『人生時間の社会学』世界思想社
- 伊豫谷登士翁, 2007「方法としての移民―移動から場をとらえる」伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う―現代 移民研究の課題』有信堂, 3~23頁
- 伊豫谷登士翁,2013「『移民研究』の課題とは何か」伊豫谷登士翁編『移動という経験―日本における「移民」 研究の課題』有信堂、3~25頁
- 岡田節子・呉栽喜, 2013「日本における結婚移住女性とその家族に対する政策」中嶋和夫監修, 尹靖水・近藤理 恵編著『グローバル時代における結婚移住女性とその家族の国際比較研究』学術出版会, 158 ~ 177 頁
- 桑山紀彦, 1995『国際結婚とストレス』明石書店
- 厚生労働省、2013「人口動態統計」上巻、表 9-18「夫妻の国籍別にみた年次別婚姻件数」、http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001112811、最終検索日2014年2月1日
- 近藤功, 2009「外国人妻たちの言語習得と異文化接触―山形県の事例を中心に」河原俊昭・岡戸浩子編著『国際 結婚 多言語化する家族とアイデンティティ』明石書店, 11 ~ 36 頁
- 賽漢卓娜, 2011 『国際移動時代の国際結婚―日本の農村に嫁いだ中国人女性』勁草書房
- 賽漢卓娜, 2014「国際結婚した中国出身母親の教育戦略とその変容—子どもの成長段階による比較」異文化間教育学会『異文化間教育』 39 号, 15 ~ 32 頁
- 猿橋順子, 2009「国際結婚外国人女性の支援を考える―言語管理とエンパワメントの視点から」河原俊昭・岡戸 浩子編著『国際結婚 多言語化する家族とアイデンティティ』明石書店, 37 ~ 74 頁
- 渋谷真樹、2013「ルーツからルートへーニューカマーの子どもたちの今」異文化間教育学会『異文化間教育』
  37 1~14百
- 志水宏吉編著, 2009『リーディングス 日本の教育と社会17 エスニシティと教育』日本図書センター
- 瀬地山角, 1996『東アジアの家父長制』勁草書房
- 武田里子, 2011『ムラの国際結婚再考―結婚移住女性と農村の社会変容』めこん
- 電通総研編, 2004『世界 60 カ国 価値観データブック』同友館
- 富谷玲子、2008「ニューカマーのことばと暮らし一横浜における市民と行政の取り組み」神奈川大学人文学研究 所編『神奈川大学人文学研究叢書 24 在日外国人と日本社会のグローバル化―神奈川県横浜市を中心に』御茶ノ 水書房、213~244頁
- 永野由紀子, 2004「『家』・『村』 理論の射程をめぐる論点と課題」 『山形大学人文学部研究年報』 1 号, 123 ~ 137 頁
- 野山広、2003「地域ネットワーキングと異文化間教育―日本語支援活動に焦点を当てながら」「異文化間教育」18号、4~13頁
- 松崎百合子,2001「移住女性の生活問題と社会的支援―98 福岡調査より」鐘ヶ江晴彦編著『外国人労働者の人権と地域社会―日本の現状と市民の意識・活動』明石書店,264~285 頁
- 宮坂靖子, 2007「中国の育児―ジェンダーと親族ネットワークを中心に」落合恵美子, 山根真理, 宮坂靖子編『アジアの家族とジェンダー』勁草書房, 100~120頁
- 森篤嗣・内海由美子, 2012「山形県における定住アジア女性の日本語使用:首都圏・全国との比較から特性をみる」『国立国語研究所論集』 4号, 37~48頁

# Support to the Woman Marriage Migrants Who Reached a New Life Stage:

# **Consideration on Recognition Gap between Local Volunteer Supporters and Migrants**

# Saihanjuna

Nagasaki University

#### Key Words: marriage migrants, support, life stage

One of the opportunities for female marriage migrants to get support from will be the Japanese language lessons given by volunteer supporters. This kind of support has helped, from immediately after their visits to Japan, the female marriage migrants, who do not have social capital, build personal relations without which they will not be able to overcome the problems they expect to meet in their host society. Such support, continuous and close, is achieving success.

In this paper, the writer is going to deal with the continuous relationship of those supporters managing a Japanese language school and female marriage migrants going to the classes there.

Female marriage migrants, through the puzzlement in early years of their visit to Japan, or an adaptation stage afterwards, go into a new life stage in which the women themselves becomes independent. It became clear during the interview that a conflict and gap between the supporters and woman migrants arouse in this independent stage.

Based on the close relationship with each woman migrant, a supporter in the Japanese language school stays close to the migrants in their life course, and offers support needed. Along a woman's life course, support sometimes goes beyond "trouble consultation". In this independent stage of their lives, support goes as far as to get each woman's empowerment demonstrated to the utmost, so that they can play an active part in public.

However, support from the supporter, who has a strong connection with the community, is given on the premise that the female marriage migrant stays in the place where she lives. In contrast, the idea of "moving between several places for independence" is included in the life design of the female marriage migrant. For this difference, both supporters and woman migrants are in trouble. Support comes to a "turning point" in this life stage.

In this paper, the writer is going to clearly show this disagreement between a supporter and a female marriage migrant on the life design assumed desirable. The writer also is going to break in and consider why such a disagreement arises, being based on the viewpoints of "place" and "movement."